「生まれる」という言葉から思うこと

大橋利恵子

最近、息子とこんな会話をかわした。

「お母さんはどうして東京生まれなのに、岐阜に来たの？」

「それはお父さんと結婚したからだけど、もしあの時すれちがってしまい、会わずに終わっていたら、お父さんとお母さんは結婚していなかったと思うことはあるのよ。そうしたらあなたも生まれてこなかったわね。」

「そうなっていたら、どうしていた？」

「さあ、東京で幼稚園の先生していたかな。でも、お母さんだって、もし日本が戦争をしていなかったら、あなたのおじいちゃんの運命が変わっていて、生まれてこなかったかもしれなかったな。一人の人間が生まれてくるにはみんなドラマがあるわね。」

中学二年生の息子がこの話をどのように受けとめたかはわからないけれど、私は何か、一人の人間の誕生の裏にある、不思議な力、運命とでもいうか、人間の力ではどうすることもできない大きなものを感じていた。

と、同時に一人一人の子どもが、何といろいろなことを背景にもって生まれてきているかということをあらためて感じさせられた。

両親の育ち、考え方のみならず、祖父母の境遇、社会の流れ、文化等々、様々なことが折り重なって「その子」がそこに誕生しているわけである。

さらに、どんな地域で育ち、兄弟関係はどのようで、近所にどんな友だちがいて……とたった三～四年間の育ちしかしていない幼児でも、一人一人の個性が違うことはあたり前とうなずける思いである。ある意味では、集団の中でみんなと同じにすることを押しつけられていない幼児期の子どもたちの方が、一人一人の違いを発揮しているのかもしれない。

いずれにせよ、私たち保育者は、この生まれた時から違っている一人一人の子どもにそって保育をしていかなくてはならない。

話が少し「生まれる」からずれていくが、この「子どもにそって」というのがむずかしい。ただ単に子どものそばにいるだけなら、それ程ではないが、ここでのそっては「子どもの気持ちにそって」ということである。子どもの要求をくみとり、何気ない援助をしていけばよいのであるが、ふと気がつくと、運動会、バザーの作品作り、公開保育等、教師

の思いが強い時など、子どもの方が教師の要求をくみとり、教師にそって活動していてくれたりして、反省することしきりである。

子どもの気持ちにそってということを考える時、私は

「朝顔につるべとられてもらい水　千代女」

という句を思い浮かべる。つるべにまきついた朝顔を、無理にひき離すのではなく、自分がよそに水をもらいに行く。朝顔の気持ちにそってあげているのである。しかし、多くの人に（もしかしたら一人だけでも）めいわくをかけていることをそのまま見逃していてもいいのだろうか？　と思ってしまうのは、教えたいばかりの教師根性であろうか。

今、私が保育の中で心がけている事は、朝顔のつるを無理にひきちぎるのでも、そのままにしておくのでもなく、そのつるが自然に伸びていけるような新しい支柱をそばに立ててあげられないかということである。

しかし、これが本当にむずかしく、なかなかできない。例えば、生き物とのかかわりでも思うことがある。子どもたちは自然の生き物で遊ぶことが大好きである。私の今、勤めている岐阜の大洞幼稚園という所では、園庭で、バッタ、カエル、トンボと何でもつかまえられる。（そのかわり、ヘビ、ムカデなどあまりいてほしくない物もいるけれど）飼育小屋には、インコ、チャボ、ウサギ、畑にはイチゴ、じゃがいも、玉ねぎ、さつまいもと、たっぷりとある自然の中では子どもたちは生き生きと遊んでいる。しかし、ふと気がつくとヤゴを側溝のみずたまりからすくい出し、カエルをにぎりしめ、トンボをビニール

袋の中に押しこめているのである。小さな赤ちゃんウサギがかわいくて、とりあいっこをしたら赤ちゃんウサギは地面にたたきつけられてしまったこともあった。

「そんなことをしたらいたいし、苦しいの。かわいそうだから大事にしてあげて。」

と言ってしまうのは簡単だと思う。命が大切なことを言葉で説明しても子どもには何にもならない。では、少しの犠牲はしかたがないと見守るのか……？

N子はウサギで遊ぶのが大好き、自分で小屋から出してきて抱いている。Y子もT子も一緒にえさをあげたり、なでたりしている。そこへ、男子たちが乱入。おれにもかせとばかりにウサギをひっぱる。遊びはじめの頃は前にも書いたようにウサギの取り合いをしていたが、しばらく遊んだ頃には、N子やY子がちゃんと手をひっこめる。「ひっぱったらかわいそうだもんね」と顔を見あわせながら、そして、しばらく待っていると、男子たちはどこかに行ってしまい、またウサギは自分たちの所にもどってくるのが解っているようである。

教師が適切な指導をした結果、新しい支柱をみつけられた実践例でなくて、申し訳ないが、N子やY子のこのあり方は、ウサギを抱き、そのあたたかさや、やわらかさを自分の手を通して実感したことから生まれてきたのだと思う。直接かかわって、そのかかわりの中からいい方法を見い出していく。それが新しいかかわりの中から生まれてきた支柱なのだと私は思う。

一人一人違って生まれてきた子どもたち、その一人一人の気持ちにそいながら、大人や

子ども同士、そして自然とのかかわりの中で、その子なりの考え方や自発性が生まれてきてくれたらいいなと願いつつ、今日もどろんこになって遊んでいる。そこに生まれてくるすてきな子どもとのかかわりを期待しながら……。

（岐阜市立大洞幼稚園）

生まれる

菅野俊一郎

先日、私の父が、このうちに泊っていった。誰かの結婚披露宴に出たとかで、夜も更けてからの来訪だった。ちょうど私も仕事をひと区切りしたところだったので、少し酒をつきあうことにした。

私の三人の息子たちの近況などを思いつくままに話し、父も、そうか、それはよかったなどと相槌をうっていたが、ちょっと改まった口調で、それは記録しておいた方がいい、と言う。自分は、いっさい、そういうことをしてこなかった、ということを、このごろ、